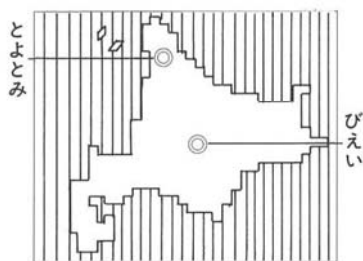


連載



地域の概要

豊富町の農業は、明治三六年に初めて開拓の鍬がおろされ、幾多の変遷を経ながら、昭和四五年以降は酪農専業に転換し、西天北農業地域の拠点として発展しています。

日本最北の地椎内市と隣接し、南は留萌管内幌延町、東は猿払村と、西は日本海に面しており北見山脈を源とした河川は中央の低湿地を流れるサロベツ川に合流し、海岸地帯を迂回しながら天塩川に注いでいます。

農耕地は、河川の流域を中心に

あのマチ・地域おこし活躍中
このムラ
NO.3

豊富町の事例

地域のキャッチフレーズは
「花と酪農と日本最北の温泉の街」

開拓され、丘陵地は洪積の粘土質で、平坦地はサロベツ原野の高、

中、低位泥炭土が大半を占め、一部、日本海に面した地帯は砂丘地帯となっています。

このように、低地は泥炭地、丘陵地帯及び傾斜地帯のほとんどが強酸性の重粘土壌で、しかも気象的には、積雪冷温地帯に属し農業の立地としては厳しい条件下にあり、発展が阻害されてきました。昭和四〇年代後半より寒冷地に適した酪農経営に転換したことを契機に、農業経営の安定化が進められてきました。

観光資源

利尻・礼文・サロベツ国立公園に位置する豊富町は、数々の景勝地があり、四季折々の色彩豊かな大地が観光客を魅了しています。

○サロベツ原生花園周辺

サロベツ原生花園は豊富町から西方に約六kmの位置に広がる日本最北の大湿原で、東西七km、南北約二・八km、面積一四、〇〇〇haの広さがあります。見渡す限りの草原と地平線に至るまで、高山性と湿原性の植物群が混在し、早春

(図-1)

豊富町・人口の推移

年度	町人口(人)	農家人口(人)
平成元年	6,142	1,383
2	6,090	1,356
3	6,055	1,345
4	5,890	1,288
5	5,777	1,232

から秋まで次々と開花を競っています。

なかでも六月から七月にかけて咲くワタスゲ、エゾカンソウの白と黄色の花は圧巻です。

また、日本海に接する原始砂丘林と湖沼の数々、南北六〇kmにおよぶ海岸線からは洋上に浮かぶ利尻富士が眺められ、サロベツ原生花園とは異なる景観が楽しめます。とくに、落日のシーンは素晴らしいものがあります。

○豊富温泉周辺

豊富市街地より東方約七kmにあ



▲豊富町農業振興計画現地検討会(平成5年4月28日)

る豊富温泉は、大正一五年石油試掘の際、天然ガスとともに湧き出した温泉で、利尻・礼文・サロベツ国立公園の周遊基地となっており多くの観光客が訪れます。

また、周辺にはゴルフ場、スキ一場、綿羊牧場、大規模草地牧場などあつて、北海道の雄大さを満喫できます。

○兜沼公園周辺

豊富市街地より北方約一三kmにある兜沼公園は、名前の通り兜の

形をした湖沼で、渡り鳥の休息地となつています。

また、北方圏に生息する野鳥が多く見られるのもこの地の特徴でキャンプ場もあります。

このように豊富町は、酪農を基幹として、周辺が観光と温泉、酪農と漁業や林業といった一次産業が中心の町です。

振興計画の主要課題

豊富町の酪農形態は、農地のほとんどが特殊土壌という劣悪な条件下にありながらも広大な土地資源を背景に農業構造改善事業等の実施により草地の改良、酪農施設の拡充や農業機械の大型化により経営の規模拡大が図られてきました。

ところが、生乳の計画生産や個体販売価格の急下落など輸入自由化に伴う急激な国内外の農業環境変化によつて、経営の安定化に向け取り組んできた計画は大きな打撃を受け、規模拡大のための投資は大きな負債の重圧を招き、借入金償還に苦しむ農家も少なくあ

りませぬ。

こうした農業情勢と農家経済を考へる中で、豊富町の農業振興に関する今後の方向について、新時代に即応した農業の確立を目指して、これまでの実績推移と組合員意向調査をもとに将来展望を拓いて行くため、過去数次にわたつて策定した農協の中期五力年計画の推進経過を踏まえ新たに農業振興計画を策定するものです。

計画が目指す将来像

抑制的な計画生産の今日、酪農経営の安定的発展を図るためには再度原点に立ち返り、徹底した生産コストの低減と生産性を高める技術を導入して、高収益生産体制の整備と良質粗飼料生産を基盤とした草地型酪農を確立することにあります。

(図一 2)

地目別	面積割合(%)
山林	31.1
牧草地	27.3
原野	21.3
沼地	0.8
宅地	0.4
その他	19.1

(図一 4)

年度	生乳生産量(t)	一頭当たり乳量(kg)	一戸当たり販売高(千円)
平成元年	46,969	6,359	23,913
2	47,696	6,355	22,845
3	49,986	6,410	21,801
4	52,172	6,496	23,130
5	66,501	6,873	24,181

(図一 3)

年度	耕地面積(ha)	乳牛総飼養頭数(頭)
平成元年	10,670	12,804
2	11,042	13,518
3	11,101	13,742
4	12,123	14,250
5	13,848	14,112

このことを通じて、ゆとりのある農家生活と離農のない活力ある農村社会の形成を目指して、豊富町酪農の望ましい経営形態は何かを提言することにしていきます。

美瑛町の事例

波のようになだらかな丘陵が続く美瑛町には、その風景の美しさから

“丘のまちびえい”のキャッチフレーズが

つけられています。

美瑛町の概要

美瑛町は北海道のほぼ中央、上川支庁管内の南部に位置し、東西四四km、南北二六kmに広がり六七、七〇〇haという広大な面積を有しています。

しかし大雪山系十勝岳連峰の山麓であるため山林原野等が八〇%を占め、農耕地は二〇%弱となっています。

地勢はおおむね波状丘陵で、畑のほとんどがここにあり、その丘陵の間をぬって美瑛川、置杆牛川、辺別川が流れ、この流域が水田となっています。

気象は内陸性で寒暖の差は激し

いものの農耕に適し、観光・レジャー施設への道路も完備されており、なだらかな丘陵や森林、十勝岳連峰など刻々と変わる雄大な景色を眺める絶好のドライブルートにもなっており、健康的で豊かな自然に恵まれた町としての環境が整っています。

美瑛町の歴史は明治一七年の入植から始まります。

この時の人口はわずか一〇人でしたが、富良野線の開通とともに人口が急増し、昭和一五年には二万人を超え、昭和三五年をピークにその後年々減少傾向を辿っていますが、それでも平成三年初では農業関係に従事する人の割合は、

全就業人口の約四〇%を占めており、これまでも主要産業である農業の活性化に向けて農業振興事業など諸施策が実施されています。

明治一七年に美瑛に開拓の鐵が入って以来九〇年余、文字どおり農業が基幹産業の町として発展してきたのです。

美瑛農業の構造

生産性の高い農業経営の実現を図るには、農業構造の再構築が不可欠であるとの視点から、美瑛町農協では「地域農業の振興計画」を策定し、これまで昭和五五年の第一次計画から第四次計画までを



▲美瑛町全景

(図一)

美瑛町人口の推移

年度	町世帯数(戸)	町人口(人)	農家戸数(戸)	農家人口(人)
昭和50年	4,287	14,826	1,265	5,851
昭和60年	4,191	13,975	1,059	4,726
平成2年	4,027	12,669	941	4,211

終了し現在は第五次計画を推進中の段階にあります。

この間、生産基盤の拡充や作物別生産部会活動の促進、加工調整施設の整備など総合的な生産性拡大を図ってきた結果、一戸当たり農家所得は全道的にも高い水準まで向上し農家のためまぬ努力の結果が現れています。

平成五年時点での作物別の農業粗生産額は畜産をトップに野菜、豆類、ばれいしょ、麦類、米、てん菜がそれぞれ一〇億円以上とな



▲美瑛町庁舎

ついでいます。

特に、野菜などの導入による複合生産体制がここ数年で着実に確立されてきているようです。

複合経営農家の占める割合は五〇%を超え粗生産額の増大に結びついていると言えます。一方、農業構造の推移を辿ってみると、実営農戸数では昭和六〇年の九一戸から平成五年で七五〇戸と減少し、専業・兼業割合は昭和六〇年に専業比率八〇%であったものが平成五年には九二%になっています。

また、高齢化はここ十数年間で

急速に進展し、六〇歳以上の経営主における後継者不在率も高く、専業農家における高齢化、後継者難と労働力の確保や効率的生産システムへの確立が大きな課題になってきました。

農家戸数が減少する一方で経営耕地面積は増大しており、また高齢化や後継者不足から所有する農地の売却処分を望む農家と、拡大を望む農家が多く見られるようになり、農地の流動化も規模拡大の方向で進んでいます。

また、農地の流動化は近年、農業環境の悪化から投資に対する抑制的傾向が強まって、農地取得は停滞気味で農地価格も低落傾向にあります。取得の形態も購入より借入による規模拡大指向が強まっています。

振興計画の主要課題

全道的な問題ですが、美瑛町でも高齢農家の後継者不在、労働力不足、離農の増加などによって農地の放出が将来益々増大することが危惧されています。

これら放出農地の効率的な利用

(図-2)

美瑛町の耕地面積 (単位: ha)				
年度	総耕地面積	水田	普通畑	草地
昭和50年	10,770	2,880	6,270	1,390
昭和60年	12,400	3,190	7,880	1,340
平成2年	12,700	2,440	8,840	1,410
平成5年	12,110	1,420	6,020	1,570

をどう進めるかが新たな課題となっています。

このため実態調査などの現状分析を行い、農地の高度利用と生産性拡大の観点から経営耕地の分散化を回避し、所有権の移転、賃貸借、作業の受委託、交換分合など総合的に斡旋・調整ができるようにするため、今後における支援システムのあるり方ならびに関係機関の役割と連携がどうあるべきなの

(図-3)

美瑛町の主要農作物作付状況 (単位: ha)					
年度	水稲	豆類	馬鈴薯	てん菜	麦類
昭和50年	1,267	2,561	1,744	860	518
昭和60年	1,490	2,240	1,820	912	2,450
平成2年	1,250	2,019	1,520	1,072	2,980
平成5年	1,430	1,560	1,490	1,190	2,650

かをテーマに、調査・検討を進めています。

(レポーター) 地域農業研究所
専任研究員 河村 彰仁)